

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月3日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26381007

研究課題名(和文) 地域構造との関連からみた中世末・近世初期日本の識字率に関する研究

研究課題名(英文) A study on literacy rate of late medieval and early modern Japan in relation to regional structure

研究代表者

八鍬 友広 (Yakuwa, Tomohiro)

東北大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80212273

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本におけるリテラシーの歴史的形成過程を実証的に明らかにすることである。このため、以下の二ような研究をおこなってきた。近世における初歩的な読み書き教育の過程を知りえる資料の収集・分析、明治期における自署率調査の結果の分析および考察。については、山形県、福島県、長野県、福井県などにおいて資料調査をおこない、それぞれの地域において編纂された独自の読み書き教材を収集することができた。また福井県においては、寺子屋の詳細な学習過程を明らかにしえる資料を収集することができた。については、これまでの調査研究結果にもとづいて、著書・論文として執筆し、公刊するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本における識字力普及の歴史的過程が、いかなる特質を有していたのかということ考察することを目的としている。近代以前の日本においては、往来物と呼ばれる読み書き教科書が無数に編纂されたことが、読み書き教育の歴史における顕著な特色となっている。本研究では、地域のなかで編纂された固有の新種の往来物を確認し、地域社会が独自の教材を産出していた状況を明らかにした。また、識字率をある程度数値により確認しえる明治期の識字調査から、識字力の地域的格差の大きいこと、ならびに当時の書記方式に則って読み書きのできる人口が、依然として限定的であることなどについて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to empirically clarify the historical process of literacy formation in Japan. For this reason, the following two studies have been conducted. (1) Collection and analysis of materials that inform the process of elementary literacy education in the early modern times, (2) Analysis and consideration of the results of literacy surveys in the Meiji era.

(1) In this research, I conducted data surveys in Yamagata Prefecture, Fukushima Prefecture, Nagano Prefecture, Fukui Prefecture, etc., and was able to collect original reading and writing materials compiled in each area. Especially in Fukui Prefecture, I was able to collect materials that could reveal the detailed learning process of Terakoya. It can be said that this is an extremely important document on the history of literacy education in early modern Japan.

(2) Based on the research results so far, I wrote as a book / dissertation and came to publish.

研究分野：日本教育史

キーワード：リテラシー 識字 往来物 教育史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の動機

本研究は、日本における読み書き能力の普及過程をできるかぎり実証的に調査分析し、その特質をあきらかにすることを目的とするものである。このような識字の歴史については、西洋社会に関する研究はその蓄積が多いが、日本においては、西洋社会におけるような大規模な婚姻署名等の識字能力の参照とし得る資料を欠いていることから、実証的な研究に困難がある。このような状況において、いかにすれば日本における識字の歴史を解明することができるかという問題関心が、本研究の重要な動機となっている。

(2) 背景

以上のような状況のなかで研究を進めるには、まず研究に資する有力な資料の発掘を進めることが重要となる。報告者は、このような資料として、花押を有する種々の文書に焦点をあて研究をおこなってきた。花押とは、17世紀前半までの間に行われていた自筆署名のことであるが、様式化された文様となっているものである。自筆署名であるために、同一人物が同じ文様を繰り返し同じように書かれなければならないことから、これにより運筆の能力の有無をみることができる。報告者は以上の問題意識から、すでに福井県や滋賀県における花押資料に関する共同研究にも従事しており、一定の研究成果を発表していた。この研究をさらに進展させることが、本研究の当初における動機および背景となっていたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本における識字力普及のひとつの画期となっている中世末期から近世期にかけての識字力分布状況をあきらかにし、これと地域構造(身分・階層・職業等の分布状況や生産の状況)との関係について考察することを直接の目的とするものである。このためには、当該地域における地域構造に関する資料調査および分析考察が必要となる。また読み書き教育機関の存在状況、および読み書き教科書としての往来物の残存状況などについて検討することも必要となる。なお、中世末期・近世期と直接関係するものではないが、識字力分布の歴史的展開を考察する一環として、明治初期に行われた識字率調査などの結果から類推し得る近世末期における識字状況とも比較考察することも、本研究における目的のひとつとなる。以上のような研究により、日本におけるリテラシーの歴史的形成過程の特質を解明することが本研究の目的となるものである。

3. 研究の方法

以上のような研究目的のために、本研究においては、以下の三つの点を研究上の方法として研究を進めた。

識字状況と地域構造との関係についての調査研究

すでに考察した福井県地域における花押資料と関連して、地域構造との関係、および当該地域における読み書き教科書等との関係についての調査をおこなうことが重要な研究方法となる。このため、福井県をはじめとする、中世末期～近世前期における地域資料を豊富に残存させている地域における資料調査、およびその分析が重要な方法となる。本研究では、福井県、滋賀県に関する以上のような調査をおこなうことを当初の方針とした。

地域における往来物編纂過程についての調査研究

前近代日本の読み書き能力形成における顕著な特色として、国家あるいは教会などの宗教団体が定める標準的な読み書きテキストが存在していなかった一方で、読み書き教科書の商業ベースによる編纂がきわめて活発であったこと、また地域ごとに無数の教科書が編纂されていたことなどをあげることができる。この結果、諸外国ではみられないほど多様な教科書が編纂されることとなった。その数は数千種類にも及んでいる。またこれらの教科書が「往来物」と呼称されていることも重要な特徴である。「往来物」とは、手紙文例集のことであり、このようなものが数百年にわたって読み書き教科書とされてきたことは、前近代日本における識字力形成の重要な特質である。本研究においては、近世前期を主要な対象として、各地域でおこなわれていた往来物編纂動向に関する調査をおこなうこととした。

明治期における識字率調査への接続

日本における識字力分布について、一定の基準によりある程度定量的に把握できるのは、明治初期にいくつかの地域で行われた自署率(自己の姓名を自署することのできる人の比率)調査以外にはない。このほかに、壮丁学力調査(20歳男子の学力調査)もあるが、これは20歳という特定の一世代のみを対象としたものであるから、抽出集団としてきわめて偏っており、また学校教育の影響を強く被っている。このため、近代学校制度導入以前の状況を知ることはできない。これに対し、いくつかの地域で行われた自署率調査は、一定年齢以上の全住民を対象とした調査であり、これにより、近代以前の識字力分布の状況についても、ある程度まで類推する資料となり得る。報告者は、すでにこれについての資料調査をおこなってきており、本研究では、それらの調査結果および、他の研究者のおこなった同様の調査研究に依拠しつつ、可能な範囲で、近代学校による教育が本格的に展開する以前における当該地域の識字力分布の

特質について研究を行うこととした。これにより、往来物や寺子屋の存在のような間接的な証拠によって形成される識字力分布のイメージを補正することとした。

4. 研究成果

(1) 福井県内における識字関係資料の収集と考察

当初の計画にもとづいて、中世後期～近世前期における豊富な地域資料を有する福井県の調査をおこなった。この結果、福井県文書館の所蔵する中世末期～近世前期古文書のうちに、花押および略押（花押を記しえない人が「一」や「〇」などの記号を記したもの）を有する有力な資料群を収集し、地域構造と関係させて考察をおこなった。その成果は、大戸安弘・八鍬友広編『識字と学びの社会史 - 日本におけるリテラシーの諸相 - 』という著書において、「越前・若狭地域における近世初期の識字状況」とする論文として発表した。

福井県文書館の所蔵する家分け文書のなかに、寺子屋門弟がおこなった文字学習の過程をきわめて詳細に知りえる資料を発見した。これまでにない精度で寺子屋の学習過程を復元し得る資料であり、本格的に分析されるならば、近世期の読み書き教育の歴史にとってきわめて貴重な知見となるものと考えられる。しかしながら、その解読と分析には長期の時間がかかることが想定されるので、別途の研究を計画することとして、本研究においてはその分析はおこなわないこととした。

このほか、江良浦地域における中世末期～近世初期の地域資料についても多数収集することができたが、これらについても、他地域における調査を進展させる必要から、その本格的な分析・考察は今後の課題として残った。

(2) 近世地域往来物の収集と考察

本研究では、主として民衆を対象として、その読み書き能力の歴史的普及過程を考察するため、前近代における読み書きのための教材として使用されていた「往来物」についても調査・研究をおこなった。すでに述べたように、前近代日本においては、国家が民衆の教育についての関心を強く持たなかったのに対し、商業的あるいは地域的な教材編纂がきわめて活発であったことが、もっとも大きな特徴となっている。往来物自体は、平安末期から貴族などを対象として編纂が行われ、これらの往来物が近世に至っても古典として使用され続けた一方で、近世期になって、それまでとは性格の異なる、近世的な往来物が夥しく編纂されるようになっていった。このなかには、地域のなかでそれぞれの地域的課題にもとづいて編纂されたものもあり、注目されるようになっていく。とりわけ、訴訟や一揆において作成された訴状が往来物となっている事例がこれまでも確認されてきており、報告者は、これらを「目安往来物」と命名し調査研究をおこなってきたところである。本研究では、これらの事例研究にもとづいて八鍬友広『闘いを記憶する百姓たち - 江戸時代の裁判学習帳 - 』（吉川弘文館、2017年）を刊行したが、その調査の過程で、福島県、新潟県、長野県などにおいて、新種の目安往来物を数種類あらたに確認することができた。これにより、これまで17世紀前半の出来事に関連していると考えられてきた「目安往来物」の編纂が、17世紀後半以後においてもおこなわれていたこと、およびその地域的な広がりや従来考えられていたよりも広域に及ぶ可能性があることなどが明らかになりつつある。これらについては、さらに別途の研究が必要であり、また可能となりつつある状況となっている。

本研究においては、また往来物の歴史的終焉についても検討した。近代学校における国語教育は、次第に往来物による教育に取って代わることになるが、しかしながらそれは一挙に展開したものではなかった。往来物編纂の最盛期が明治期であることから明らかなように、明治初期においては、往来物の形式による国語教育が展開されることとなる。近代的な国語教科書の編纂が進んでいくと、往来物は学校から姿を消すこととなるが、一般的な書式文例集としてなおその命脈をとどめていくこととなる。以上の経緯については、八鍬友広「往来物と書式文例集 - 「文書社会」のためのツール - 」(若尾政希編『シリーズ本の文化史3 書籍文化とその基底』平凡社、2015年)として刊行された。

(3) 明治期の自署率調査からみる識字状況の分析と考察

識字率を一義的に定義することは不可能であるが、一定の指標によりその分布状況を量的に把握することは必要不可欠である。しかしながら、前近代日本においては、前述した花押を有する資料以外に有力な資料群が存在せず、また花押を有する資料も17世紀初頭を下限としているので、それ以後の量的研究は困難である。近世末期の識字状況を把握するためには、それゆえ、明治初期に行われた自署率（自己の姓名を記し得る人口の比率）調査から類推することが重要となっている。

本研究では、以上のような観点から、明治期にいくつかの県および地域でおこなわれた自署率調査についても調査研究をおこなった。このような自署率調査としては、滋賀県、鹿児島県、岡山県、山口県、和歌山県などの事例が知られている。このうち、滋賀県、山口県に関する事例について調査をおこない、地域ごとの自署率の分布状況、職業比率および就学率との関係、世代間の自署率の関係などを検討した。これらの研究成果は、八鍬友広「民衆教育における明治維新」(明治維新学会編『講座明治維新 第10巻』有志舎、2016年)、八鍬友広「明治期滋賀県における自署率調査」(東北大学大学院教育学研究科『研究年報』第64集第2号)などに

まとめられた。

(4) 日本におけるリテラシーの歴史的形成に関する考察

以上の諸研究によりながら、本研究では、日本における識字の歴史的形成の特質に関する検討もおこなった。日本におけるリテラシーの歴史的形成について、種々の調査研究から明らかになった点として重要なことは、その状況がきわめて多層的であるということである。性別、地域、職業比率などによって、リテラシーの状況は驚くほど多様である。またひとくちにリテラシーと言っても、それがいかなる識字力であるのかもきわめて多様である。平仮名のみを読める水準から、正格漢文の読解・作成が可能な水準まで、多様な能力の水準がありえる。このようなありようは、リテラシーのスペクトルとも呼ばれている(大黒俊二「文字の彼方に声を聴く - 声からの/声に向けての史料論 -」(『歴史学研究』No.924、2014年)。まさに分光器から分かれる光の成分のように、リテラシーは多様である。以上のようなリテラシーの多様性に関し、日本の状況に即して検討したものとして、八鍬友広「明治期日本におけるリテラシーの多層性」(民衆史研究会『民衆史研究』第88号、2014年)、八鍬友広「リテラシーの広がり」(河野貴美子ほか編『日本「文」学史 第二冊「文」と人々-継承と断絶』勉誠出版、2017年)が公刊された。

識字力は人間にとって生来的なものでないことから、必然的に、識字のための教育を不可欠とする。したがって識字の歴史は識字教育の歴史でもある(矢田勉『国語文字・表記史の研究』汲古書院、2012年)。しかしながら、これまでの教育史研究では、現在行われているところの近代学校による教育の像を過去にも投影して、そのような像への接近の過程として識字教育の歴史をみなしてきた。すなわち、今日のような自然と社会に関する知識および世界観の形成のための教育というアナロジーのもとに識字教育を捉えようとしてきた。しかしながら、前近代における識字教育は、第一義的には識字という技術の育成にかかわる教育であり、過度に現在の教育の像を投影してこれを考察すると、その実像をゆがめてしまうことにもなりかねない。本研究では、前近代日本における識字力の分布および識字能力形成の歴史に関する実証的研究を踏まえつつ、識字という技術の育成という視点から識字の歴史を捉える枠組みについても検討した。このような視点から前近代日本の識字史を把握することは、近代学校がおこなう教育の特異性を一層明瞭に認識することにつながるものとなることを明らかにした。これらについては、八鍬友広「識字の歴史研究と教育史」(『教育思想』第45号、2018年)として発表したところである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

八鍬友広、識字の歴史研究と教育史、東北教育哲学教育史学会紀要『教育思想』第45号、2018、pp.199-219 (査読なし)

八鍬友広、明治期滋賀県における自署率調査、東北大学大学院教育学研究科『研究年報』第64集第2号、2016、pp.1-18 (査読なし)

八鍬友広、明治期日本におけるリテラシーの多層性、民衆史研究会「民衆史研究」第88号、2014、pp.5~20 (査読なし)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 5件)

八鍬友広、闘いを記憶する百姓たち - 江戸時代の裁判学習帳 -、吉川弘文館、2017、全194頁

河野貴美子/Wiebke DENECKE/新川登亀男/陣野英則/谷口眞子/宗像和重編、勉誠社、2017年、日本「文」学史第二冊「文」と人々 - 継承と断絶、執筆者、河野貴美子、八鍬友広など34人、執筆部分、第三部第四章「リテラシーの広がり」、pp.364-391

明治維新学会編、講座明治維新第10巻明治維新と思想・社会、有志舎、2016年、全274頁、執筆者、小林丈広・若尾政希・桐原健真・谷山正道・斎藤洋一・白川部達夫・八鍬友広・石居人也、執筆部分、第6章「民衆教育における明治維新」、pp.184-225

若尾政希編、シリーズ本の文化史3書籍文化とその基底、平凡社、2015、全356頁、執筆者、若尾政希、岩坪充雄・梅村佳代・八鍬友広・佐藤宏之・岩橋清美・小池淳一・鈴木

理恵・和田敦彦、執筆部分、往来物と書式文例集「文書社会」のためのツール、pp.157-183

大戸安弘・八鍬友広編、思文閣出版、識字と学びの社会史 - 日本におけるリテラシーの諸相 -、2014、全 372 頁、執筆者、鈴木理恵・大戸安弘・木村政伸・梅村佳代・八鍬友広・太田素子・川村肇、執筆部分、第 6 章「越前・若狭地域における近世初期の識字状況など」を分担。pp.209 - 238

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。